

第72回 公開講座

Bunte Welt 「カラフルな世界」で生きる子供たちと女性たち

— ドイツにおける「多文化共生」への新しい動き —

日 時 2012年11月30日（金）13：00～14：30

場 所 千里山キャンパス 尚文館 1階 マルチメディアAV大教室

講 師 杉谷 眞佐子（外国語学部教授）

21世紀に入り、人々の移動は増えている。経済的問題を抱えながらも、或いはそれゆえに、グローバル化による相互依存の高まりはアジアにおいても例外ではない。欧州連合（European Union, EU）による統合の深化が進むヨーロッパで各国は、市民の「移動する力」（mobility）の育成に努力している。なぜならば移動力は、個人の生活の可能性を拡げ、社会を活性化するからだ。そのためにはしかし、外国語の学習や「言語を学習する力」の育成が重要となる。2002年バルセロナでの「欧州首脳会議」では「母語+2言語/外国語」という政策を促進することも合意された。このように多文化共存をめざす世界では、マジョリティも複数の外国語を学習する時代が到来している。またその結果、積極的に国境を越え、キャリアを活かし、より豊かな生活を求める人々、例えば、優れた技能を持ちそれを活かすことができる国へ移動する人が増えている。

ところで「移動する人々」のなかには、経済的理由、或いは政治的・社会的理由から難民となり、他国で生活の基盤を求める人々も少なくない。ヨーロッパではかつては旧ユーゴスラビアの内戦による難民が、現在では経済格差の影響などから西側諸国へ移動し、そこで就業し定着する人々が多く存在する。

移動するさまざまな社会層の人々は、子どもを連れた家族であることが多く、彼らを受け入れる国に取り、共存への新たな課題が生じる。その一つが、人権にも関わる「子どもの教育」である。既に日本でも多くの地域で取り組みが進められているが、「移民受け入れ」という合意がない社会では、構造的な制限が存在することも多い。

本日テーマとして取り上げるドイツは、長年外国人労働者を受け入れながら「移民国ではない」と主張してきた。しかし2005年、現実を迫認する形で「移民国」へと舵を切り、社会的統合のための諸策を進めている。なかでも、子どもたちの言語教育は重視されている。言語は日常コミュニケーションの手段であるとともに、思考の手段でもあり内面の成長に大きな影響を与えるからだ。生活言語と学習言語の習得が時間的にかなりずれることは、既にカミンズ等の研究から明らかにされているが、往々にして「日常会話ができるので、授業も分かるはず」と見なされることがある。その理由として、就学前教育（学習）における言語運用力育成の重要性が十分に認識されてこなかった嫌いがあるといえよう。より安定した社会的統合をめざし、主に移民の子供たちの言語教育に専門的に取り組むことを目指す改革がドイツでは進められており、そこでは多くの女性達が活躍している。それは就学前教育の場であり、その主要な担い手は保育士たちである。文字通り多彩な世界で生きるための言語力育成へ向けての改革は、多くの女性が働く就学前教育の場をどのように変えていこうとしているのだろうか？

* * *

●聴講無料 予約は不要です。多数のご来場を歓迎します。
手話通訳が必要な場合は、11月15日（木）までに人権問題研究室へご連絡ください。



THINK×ACT
KANSAI
UNIVERSITY

関西大学人権問題研究室

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35 阪急千里線「関大前」駅下車
Tel 06-6368-1182 Fax 06-6368-0081

ホームページ <http://www.kansai-u.ac.jp/hrs>